



隈府小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 隈府小」

隈府小学校
学校だより No20
文責 芹川博文
9月26日(金)

日々の積み重ね 学びの大切さ

～ 研究授業で先生方も学んでいます ～

1年生と6年生の授業。どちらも子どもたちの真剣なまなざしが印象的でした。そして、日々の積み重ねの大切さ、学びの大切さを改めて感じました。

6年2組の有働加織先生の算数の授業（左の写真）には、菊池管内から40名以上の先生方が参観にられました。また、



1年1組の古閑智恵子先生の算数授業（右の写真）は、隈府小の全職員が参観し、授業後は職員同士で授業について振り返り、学びを深め合いました。



「よい指導者は、よい学習者である」という言葉があります。教師も常に学び続けています。授業の視点も、以前は「教師がどう教えるか」でしたが、今は「子どもがどう学ぶか」に焦点が当てられています。子どもが学びの主体者です。

小学校では1年間の授業時数はざっと1000時間、6年間では6000時間の授業数です。気の遠くなるような量ですが、だからこそ日々の積み重ねが大切です。紙に置き換えると、A4のコピー用紙1枚の重さはわずか4～5gでも、6000枚では約25～30kgになります。

小さな花苗 春を待つ

ずらりと並んだ1000以上のポット。その中には、割りばしで一つ一つ丁寧に移植され、「和菓子のように」小さく並んだ苗たち。栽培委員担当の緒方知子先生を中心に、今年度も隈府小伝統の「桜草プロジェクト」が動き出しました。



緒方先生に聞くと、夏休みの間、昨年度の種を自宅に持ち帰って発芽させ、その後、ご家族総出で移植されたとのこと。そんなことを知ってか、続きの植え替え作業をされていた他の先生の姿も。思いが一杯詰まった桜草です。



私も少しだけ参加する中で、様々な発見と感情を覚えました。数えきれないビッシリと発芽した苗の中から、「この苗」と選んで摘み上げる瞬間の、小さくても「命そのもの」に触れる感覚。ふと隣のポットを見ると、数日前に移植されたばかりなのに、確実に大きく成長している葉。

これから厳しい冬を越え、春を待つ桜草。卒業式、入学式の準備が、ここでも始まっています。

「実るほど 頭を垂れる 稲穂かな」～ 収穫の季節を迎えて ～

「実るほど 頭を垂れる 稲穂かな」・・・小学5年の終わりの日、私が担任の先生からいただいた短冊に書いてあった言葉です。当時の私は我が強く、本当によく怒られていました。調子に乗って人の心を傷つけてしまうことも。そんな私にこの言葉を選んでくださった担任の先生の思いを想像します。私が持ち帰った短冊を、母親はテレビの上のガラス棚の中に立てかけ、以後、長年飾ってありました。



実りの季節を迎えます。あと2週間で学校も前期終了です。たわわに実って「頭を垂れる」稲穂を見ながら、日々の学校生活を振り返ります。何一つ「当たり前」ではないことを噛みしめ、感謝の思いで実りの秋を味わいたいと思います。